

---

# 白黒逃避行

空波四季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白黒逃避行

### 【Zコード】

N1649Z

### 【作者名】

空波四季

### 【あらすじ】

村を追われた主人公が森で妖精と出会う、ボーイミーツガールな話。作者が不真面目なので更新は不定期です。

## 君とい出逢つた日（前書き）

初投稿です。更新は不定期になると思いますがよろしくお願いします。

# 君と出逢つた日

俺は今森の中を走っている。樹は空を覆わんが如く茂り、もはや晴れているのか曇っているのか定かではない。森の中は薄暗くジメジメしていて、体からキノコが生えそうだ。そんな森の中を俺は枝が皮膚をかなぐるのも厭わざがむしやらに走り続けている。

「ハア、ここまでくれば、ハア、大丈夫、だろ……。」

そういうて踏み出した先で唐突に地面が消えた。正確にはそこは崖になっていた。

俺は落下した。  
.....。

…体の節々が悲鳴をあげている。さっきの落下のせいで体のあちこちをぶつけたからだ。幸い大きな怪我をしておらず、気も失っていないかった。

「……あー、いてえ。それにだせえ。……しかし此処はどこだ？」

俺は軋む体を煩わしく思いながらも立ち上がった。周囲には草はぼうぼうと生えており、更に茶色で視界が埋まるほど樹木が群生している。

俺が落ちてきた崖は遙か上にあり、上に登るのは難しそうだ。構造としては、巨木の上を崖が覆っているといつ感じだろうか。きっとの逆向きみたいな形をしているんだろう。

とりあえずこのまま呆けていても埒が明かないのでとにかく歩いていく。幸い此処なら追つ手の心配はいらぬさうなので焦る必要もない。

「しかし、ホントに此処は何処なんだ？」

俺は思考を巡らす。

だが全くわからず、諦める。それに今は此処から出る方が先だ。こんなところにいたら食べるもの飲むものもなく餓死してしまいそうだ。

そう思い、俺は黙々と歩を進める。

10分程歩いたどううか、何やら前方で音がする。… 獣どううか。  
だとしたら…… ついている。

音は次第と大きくなり、一際大きな音がしたと思つたら、一メートル弱の熊が襲い掛かってきた。

猛々しい唸り声をあげ、俺をその大きく鋭い爪で切り裂くとする。

しかしその爪は俺を切り裂くことはなく、熊は驚きの表情を見せる。

なぜなら俺が熊の爪を指から伸びた黒く長い爪で受け止めたからだ。

長さは恐らく九十センチメートル程度。

その薄さとは裏腹に強靭な硬さと耐久力を兼ね備え、更に鋭くなっている。

「相手が悪かつたな。悪いが死んで俺の夕飯になってくれ。」

俺はその爪で切り裂き、最後に心臓を一突きにして熊を殺した。おれが生きていくために。

殺した熊を引きずりながら更に奥へと進む。割と重いが、まあたいたことはない。しかし：

「食糧は確保したけど水がないな。どっかに川とかねえかな。」

動物がいたんだから水もあるだろうが、だからといって簡単に見つかるかといったら話は別だ。

「ハア、自力で見つけ出すしかないよな。」

溜息が一つにほれる。ああ、憂鬱だ。

それにさつさき熊を殺した時に浴びた返り血で服が血生臭いことも俺をさらに憂鬱にさせる。泣きつ面に蜂とはこのことか。

そんな思考を巡らせていると、どこかで水滴が跳ねる音が聞こえた  
……気がする。予感かもしれない。

何かに引き寄せられるように俺はその方へ足を向けふらふらと歩を進めていく。

歩くごとに周りの木々が減つてきて徐々に視界が晴れてきた。草も背丈が低くくなり、歩きやすくなってきた。

その先に見えたのは……

「…………綺麗だ。」

そこで俺が見たものは、大きく澄んだ泉とその泉の真ん中で跪く天使のような少女の姿だった。

## 弁明（前書き）

調子乗つて書いたらなんか書けた。でも内容はあんまない。

そこにいた少女は本当に美しい少女だった。透き通るような白い肌をしており、まるで水晶のようだ。さらに体の線は細いが女性的な質感のある四肢。実に均整が取れている。顔は小さく少し大人びた顔付きで、可愛いというよりは美人といった感じだ。目はキツすぎず、しかしあつとりとした感じでもなく、このあたりが大人っぽさを醸し出しているのだろう。さらにこれと長い睫毛が相俟つてどことない儂さを漂わせている。

しかし最も特徴的なのは、腰まで届いている透明感のあるライトグリーンの髪だ。艶があり、どこからか洩れ出している光りを反射して輝いている。

よく見れば目も同じ色をしている。  
彼女の姿は神秘的で神々しささえ感じる。そつ、まるで人間ではないような……。

彼女のあまりの美しさに俺が見惚れていると、彼女はこちらに気付いたようだ。最初は驚いたような顔をしていたが、直ぐに眉根を寄せてこちらを睨んできた。

「…あなた誰？ 一体どこから入ってきたの？ それに、……その熊はなに？ あなた、人間じゃないの？」

嫌悪感が多分に含まれていたこの言葉が胸に刺さり、俺は正気に戻つた。

「あー、えっと、怪しいものじゃない。たまたま落ちて歩いて来たら此処についたんだ。それとこの熊は襲い掛かってきたから殺したんだ。食べ物もなかつたし。…あと俺はとりあえず、人間、…だと思つ。」

「嘘つー…だつてここには結界が張つてあるのもの。人間が入つて来られるわけない！あとどうやつたら人間が熊を素手で殺せるつていうのー。」

「…よく素手だつてわかつたな。」

「わかるわよそれぐらい。見たところ武器だつて持つてなさそうだし。」

「銃で撃ち殺したかもしれないだろ？。」

「……………。いや、知らないならいいんだ。」

「……………。いや、知らないならいいんだ。」

ちなみにこの世界で銃は一般的なものである。城の衛兵なんかは必ず所持している。

「なにはどうあれ、結局素手で殺したんでしょう？」

「まあ、な。」

「じゃあ例えあなたが人間だつたとして、熊を素手で殺して結界を通り抜けてくるような輩を警戒するなつてほつが無理だと思わない？」

「……御尤もです。」

正しいのは彼女だった。そりやそりや。俺だって今の俺みたいな奴が突然現れたら警戒するどころか縄で縛り上げて取調べを行うだろう。それを思えば彼女の態度は慈悲深いものだろう。  
しかしこのままではまずいのでなんとか警戒を解いてもらわないといけない。

……………どうしたらしいだろう。何か名案はないだろうか。

そうだ、一か八か……

「俺は君に危害を加えるつもりはない。」

「だから……」

「その証拠に！俺の秘密を、姿を見せる。」

「…………え？」

## 弁明（後書き）

果してその正体とは！？  
…きっと次回はそれだけです。

## 俺の正体（前書き）

前の予告通りです。

## 俺の正体

「あなたの正体って……、それは気になるけど。でもっ！別にそれを明かされたからって信用すると悪いの？」

こつ返して来ることはだいたい予測はついている。しかし、俺にはこうすることしか出来ない。他にも手段があるのかもしれないが、生憎と俺には大した教養もないのを思いつかない。だから、俺は話しつづける。

「いいから聞いてくれ。俺はこの秘密のせいで何時も酷い目にあつてきた。この秘密をあんたがばらしたら俺は直ぐに此処から逃げないといけなくなる。捕まつたらたぶん極刑だろ。」

「……いいわ、話してみて。」

「どうやら少しほは信用されたようだ。」

「ありがとう。まず俺の名前は、ヴォイド・クルータス。俺は小さな村で生まれた。生まれは普通なんだ。でも俺は、生まれた頃から他の人間とは違った。決定的な。まず見ての通り髪も目も真っ黒だ。」

「そういって俺は自分の髪と目を指差した。

「しかしまあ、なかにはこんな奴もいるらしい。俺のいた村の村長が見たことがあるっていってたらしい。俺は見たことないけどな。でもそんなことは些細なことだ。これから見せるものに比べればな。」

「

俺はそういって着ている服を脱ぎだして上裸になる。別に露出したかったからとかじゃない。

しかし彼女は予想外だつたらしく、慌てて目を覆う。

「ちょっとー? ななんなんで服脱ぎ出してるのー? な、ナニを見せ  
る気ー?」

とか言いつつ顔を隠している両の手指の隙間から真っ赤な顔が覗いているのは気のせいだろつか。

「落ち着いてくれ、これ以上は脱がない。…いいか？俺の背中を見てくれ。」

俺は彼女に背を向けそういった。

「……なに、これ。」

当然の反応だろう。なんせ俺の背中には黒く小さな羽が生えているのだから。サイズは成人男性の手の平くらいで約20センチメートルだ。自分で言うのもなんだが、なかなかに毛はふさふさしていて気持ちいい。この羽は大きさを変えることが出来、普段はこのサイズにしているが、最大で3メートルほどになる。ちなみに何故落ちたときにの羽で飛ばなかつたのかと聞かれたら、それは樹が邪魔で飛べなかつたからだ。

ということできょととした悪戯心も手伝つて、羽を最大まで広げてみた。

「ひやあっ！？えつ、大きくなつた！？」

「こちから仕掛けていてなんだが思った以上に可愛い声で驚いたの  
で、俺はシリアルな話をしているはずなのに可笑しくなってクス  
クスと笑ってしまった。

「なに？ なんで笑ってるの？」

よくわかつてない彼女は不思議そうにこちらを見てくる。

「いや、思ったよりも可愛い声だったからちょっと可笑しくって。」

すると彼女は顔を真っ赤にして怒りの形相で睨みつけてきた。

「それって私に可愛くないって言つてるの？」

「そんなことは言つてない。アンタって美人で大人っぽいし、ちょ  
うと意外だなって思つて。」

すると今度も顔を真っ赤にしたが、さつきの怒つている表情とは違  
つて照れたような表情を浮かべている。

思わず抱きしめたくなる衝動を理性を総動員して抑える。

「それと、ほら。」

俺は自分の爪を伸ばして彼女に見せる。

「……これって爪？触つてもいい？」

「そりゃ構わないけど……。」

俺が言い終える前に彼女は恐る恐る俺の爪に触ってきた。

「黒くて長くて、……硬いのね。……ねえ、羽にも触つていい？」

「巻つたりしないならどうぞ。」

すると彼女は心外だと言わんばかりに顔をしかめた。

「失礼ね、そんなことしないわよ。」

-もふつ-

とか言つておきながら大胆にも鷺掴みにしてきた。

「触りすぎだつ……本当に嫌なきか……？」

「『ハ』『ジ』めんなさい！ 気持ち良かつたからつこ……。」

彼女の手から伝わってくる体温が心地好かつたのは秘密だが、髦られるかと思ったのは確かだ。毛を刈られる羊もこんな気持ちなのだろうかと思つてしまつた。

俺は彼女に手を離してもらい（彼女はとても残念そうにしていたが  
気にしない）  
続きを話した。

「とにかくつ！俺は自分のことを人間だと思いたいけ！けど、……  
村の奴等は、悪魔だって、言つてた。」

「…………。」

彼女は黙つたまま何も言わない。その心中は定かではないが、表情は少し曇つている。

「これが俺の正体だ。」

## 俺の正体（後書き）

次は彼女の正体が明らかに…となると思います。

## 彼女の正体 其の一（前書き）

思つたんですけど他の作家さんはよくあんなに長い文章が書けますよね。慣れでしょうか、それとも根気の差でしょうか。

「…………。」

「…………。」

一人の間には重たい空気が漂っている。彼女は俺が話したきり黙つたまま。一人の間に会話がないせいで鳥の囀りがやけにはつきり聞こえる。

これを言つたのは失敗だったかと思いはじめて何とか場を和ませようと言葉を紡ぎましたとき、

「…………わかった。私はあなたを、ヴォイド・クルータスを信じる。」

彼女は微笑みながら応えてくれた。

「ありがとつーーー。」

何とか信用してもらえたようだ。俺はホッと胸を撫で下ろす。

「それで早速で悪いんだが水場がどこかに案内してもらえないか？体が血生臭くってな。その泉は駄目なんだろう？」

「ええ、そうね。此処は一応神聖な泉だから。水場はこいつち。ついで来て。」

彼女は身を翻しついて来るよつこ言ひ、そのままどんどん進んでいく。俺は彼女の背中を追つて、片手で熊を引きずりながらついていく。

ちなみに彼女の着ている服は柔らかそうな糸で織られたシンプルなワンピースだ。色は少し薄めの黄色で暖かさを感じさせるものだ。そのワンピースと髪の間から時折ちらつく白い肌が妙な色気を持つていて危ない気分になってしまいそうだ。

……駄目だ、なにか会話でもしなければ！

「なあ、そういうやまだんたのことを聞いてなかつたんだが。よければ教えてもらえるか？」

「そりいえばそりだつた、わね。私の名前はセイリア、セイリアって呼んで。」

「わかつた、セイリア。それでセイリアは人間なのか？こんな森の

奥に女の子一人で住んでいるから違うと勝手に思っているんだが。  
もし人間なら謝る。」

セイリアは目を見開いてこっちを凝視してくる。

「……それがわかって怖くないの？」

恐る恐るといった感じでこちらを窺つてくる。意味がわからない。  
なにをそんなに怯えているんだろう。

「怖いわけないだろ。自分自身が化け物みたいなものなのに。それ  
に俺は初めてセイリアを見たときは天使かと思つたし、今でもそ  
うじゃないかと思つてる。だから、そんなに怯えた顔をしないで  
くれ。なんだか悪いことしている気分になる。」

俺は自分の思つていることをそのまま言つてやつた。すると彼女の  
顔は暗くなつて、と思えば朱くなつて最終的には俯いた。

「なにかマズイことでも言つただらうか？」

「お、おい、大丈夫か？…なにか気に障るよつなことでも言つたか  
？」

俺の言葉を聞いた彼女は首を強く横に振った。

「違うのっ…嬉しかったの…馬鹿っ…  
ガト。」  
アリ

見るとセイリアはライトグリーンの綺麗な目を潤ませ、涙を数滴流していた。

彼女の言葉を聞き、その姿を見て少なからず驚いたが、彼女の涙を指で拭つてやり彼女の目を見て、優しく頭を撫でた。  
絹のよろに細くサラサラとしている。

「なにがあつたかは知らないが俺でよければ話しを聞く。俺の秘密も明かしたことだし。こんな所で会つたのもなにかの縁だ。腹を割つてお互いのことを話そうぜ。」

「……うん、わかった。」

よつやくセイリアは笑ってくれた。花が咲いたような明るく綺麗な笑顔だ。

「でもそのまえに、私は天使じゃなくて妖精だから。覚えておいてね。」

はい、すこません、其の一に続きます。

## 彼女の正体 其の一（前書き）

大して書いてないくせに久しづびりの投稿です。ホント、定期更新つて尊敬します。

## 彼女の正体 其の一

俺達はそのあと水場に行き、俺は熊の解体をしたもの洗い、それから体を洗いにかかった。

こここの水場の水もさつきの泉と同様に澄んでいて、それにひどく冷たい。熊の処理をしていると手が真っ赤になってしまった。このままでは凍えてしまうので、俺はさっさと体を洗ってしまおうと思つて血が付いた服に手をかける。

すると大慌てで彼女は両手で顔を覆つて背中をしおり側へ向けた。

「ぬぬぬ、ぬ脱ぐなら先に言つてよーあなたには羞恥心といつものがないのー!?」

とか言いつつチラチラといちらを盗み見している。……妖精は異性の体に興味津々なのだろうか？ それともそういうお年頃なんだろうか？ …… それともセイリアが……まあいいか。

「今度は下まで脱ぐから、な？ まあ見たいのなら構わないが。」

「そんなわけないでしょーなに言つてんじょー。」

「噛んでるぞ。」

「~~~~~つ、バカッ！変態ツー！」

そつ怒鳴ると彼女は向こうへ行つてしまつた。…………よし、今のうちに体を洗つておこう。

体の芯まで凍えてしまつた俺は体全体をブルブルと震わせながらセイリアが行つた思われるほうへ足を運んでいた。俺は現在着替えの服なんかは当然持つていないので、血の色と匂いを丁寧に落としたびしょ濡れの服を着ている。それがまた一段と体を冷やしていく、血のついたままのほうが良かつたかもしないと早くも後悔をしている。なので、セイリアに機嫌を直してもらい服の代わりがもしあればそれを貸してもらうため、ない場合でもとりあえず今彼女に嫌われては非常に困るので、最低でも機嫌を直してもらうために彼女の後を追つているわけだ。

そんな風に画策しているうちに彼女の背中が見えてきた。木の幹に背中を預けてひざを抱えて座つている。こちらからは表情は窺えないが、さつきの様子だときつとまだ怒つて眉間に皺でも寄せているだろう。とりあえず機嫌を直してもらわないといけない。ここは素直にからかつたことを詫びることにしておき。どうせ俺には上手い嘘なんてつくことはできない。

呼吸を整えてセイリアに話しかける。

「セイリア、さつきはすまなかつた。少しからかおうと思つただけだつたんだ。セイリアがそんなに怒るとは思わなくて……久しぶりにまともに会話できて嬉しかつたんだ。」

そうだ、俺は久しぶりに嫌な思いをせず対等に会話出来たことが嬉しくて調子に乗つていたんだ。化物みたいな俺の正体を知つても俺を蔑んだりすることなく扱つてくれて、彼女なら大丈夫かもしけないと思つてしまつたんだ。化物のくせに。

「そんなに怒つてないわよ。だから一々深刻そうな顔をしないでくれる?なんだか私が悪いことをしたみたいだわ。」

彼女は呆れたような表情をした後、悪戯っぽく笑つてウインクを飛ばしてきた。それは、俺がウジウジと悩んでいたものなんて一瞬で粉々に破壊した。いや、してくれた。今まで悩んできたことが馬鹿馬鹿しくおもえるほどに。……俺は救われたのだ。口々口が軽く、体を縛っていた鎖が少し切れた感じがした。このことは一生忘れることはないだろう。

「つて、服がびしょびしょじやない!なんで着替えが無いって言わなかつたのよ!」

「『』前にセイリアが逃げていつたんだ。」

救われた恩はひとまず置いておいて冷静に突つ込む。すると、む~、と頬を膨らませたセイリアは何かをぐちぐち呟いた後、まあいいわと言つて俺に提案してくる。

「向こうの小屋に毛布が一つあるわ。それを巻いて火に当たりましょ。」

俺には反対する理由などないのでそれを了承し、今度は小屋に向かって歩き出す。

…………どうでもいいが今日はやけに連れられて歩いている気がする。しかしそれも何処となく心地いいもので悪い気はしなかつた。

彼女の正体 其の一（後書き）

全然正体について触れませんでしたねスミマセン。次はたぶん大丈  
夫、のはず。

## 彼女の正体 其の三（繪畫版）

そういえば前回から書き方を少し変えてみました。これからはそんな感じでやつてこいつと思っています。

着いてみると、まあ随分と立派な小屋ですねと皮肉の一つも言いたくなつた。小屋というのは一般的にこじんまりとしていて人が一人暮らすのがやつとな感じの建物ではないのだろうか。それと言い過ぎだとしても、断じてこれは小屋ではないと言い切れる。なぜなら……

「……でかい。なんだこれは。」

そう、そこに建つてはいたのは一階建ての少し年季を感じさせる屋敷だつたのだ。俺のいた村の村長の家も俺からすればかなりの大きさの家だつたが、この屋敷は規模が違う。ざつと見たところ横の長さも縦の長さも50メートル以上、高さも10メートルはあるんじやないだろ？

「まあね。でも小屋は小屋でしょう？」

「いや、いや、こりの家は屋敷つて呼ぶんぢゃないか？」

：きつとセイリアは言葉をよく知らないんだろう。妖精つて言つてたしな。その証拠に彼女は白い顔を青くさせて、そうだつたの！？とか小声で言つて戦慄している。彼女に掛かれば城とかいう天を衝くように大きな建物すら小屋になつてしまいそうだ。見たことはないでの大きさまではわからないが。

「まあそんなこと知つてたけど。ちょっとあなたの学力を試しだだけよ。」

しかしほセイリアはこめかみに冷や汗をかきながら今更のよう取り繕つてくる。本当にこまかすことが出来ると思つてゐるのかは判らないが、大人びた感じのセイリアがそんなふうに慌てて取り繕う姿を見ると頬が緩んでしまつ。

「……何笑つてゐるの？早く入るわよ。」

頬が緩んでいるのがばれたのか若干不機嫌そうにこちらを軽く睨んでくる。俺もいい加減寒くて死にそうなのですが、すぐに詫びて屋敷の中に入ることにした。

俺は屋敷の中を進んでいきいくつもある部屋のうちの一つに通された。部屋の中には簡素な机と椅子、それに暖炉があるだけの質素な部屋だ。大きめの窓から柔らかい日差しが差し込んできて部屋の中は割りと明るい。セイリアは毛布を取つてくるといって部屋から出て行つた。俺は彼女が部屋から出て行くと、さつき彼女が火をつけてくれた暖炉の前に急いで座り込み暖をとつてゐる。急に暖かくなつたので思わず体がぶるつと震えたが、すぐに慣れて今は熱が体に染み込んで心地よい。火がありがたくて涙が出てきそうだ。  
……そういえば羽も服同様にびしょ濡れだ。鳥と同じような羽だが、俺の羽の毛はもふもふしているので幾分か水分を吸收しやすい。そのため、雨が降つてゐるときは飛ぶとともに疲れるのだ。

というわけで羽を乾かそうと思つた俺は、上に着ていたボロボロで冷たい服を脱ぎ、背中を暖炉に向ける。そして羽を1メートル強ほど伸ばして内側へ反るようにして暖炉の熱を余すところ無く活用しようと試みる。これがなかなか上手くいき、羽全体に熱が伝わり徐々に羽が乾いていく。

そうしていると部屋の扉が開けられセイリアが顔を覗かせる。と、

「何であなたはこつも服を脱いでいるのよ。」

またもや顔を林檎みたいに真っ赤にして叫んだ。

「ああ、ちょっと羽を乾かしたくてつい……。」

「つこじょなーつ……はあ、いいわよもづ。私が慣れればいいん  
でじょう。」

そういうとどこか諦めたような雰囲気を漂わせながら非難がましい  
目で俺を見てくる。セイリアが意識しすぎなんじゃないかと思つた  
がおぐびにも出さない。

彼女は俺に毛布を手渡しして俺の横に足を崩して座つてくる。距離  
的には10センチぐらい。忘れられているかも知れないが、彼女は  
空前絶後の絶世の美女なのだ。俺の鼓動は速さを増して少し胸が苦  
しくなる。

そんな俺の気も知らないでセイリアは上目遣いにこちらを見て、柔  
らかくて瑞々しい唇を使って言葉を紡ぐ。

「それで、…………私の話も、聞いてくれるのよね？」

期待と不安が入り混じった顔で言われセイリアは俺の話を聞いてい  
なかつたのかと少し落ち込んだが、俺も似たようなものだと思い納  
得する。だから、その不安を消し去つて安心させるために俺は笑つ  
て答える。

「勿論だ。約束だしな。」

「…そうだったわね。うん、ありがとう。」

心拍数が跳ね上がるような笑顔をこちら向けてくる彼女に、俺は動搖が顔の出ないように先を促す。

「まずは人間からは精霊と呼ばれている存在で、この森を守護している精霊よ。でも私は妖精って言われるほうが好きだから妖精だといつているわ。まあ、妖精も精霊も呼び方が違うだけでどちらも同じ存在だからあまり意味は無いんだけど。それで主な仕事はこの森の環境を、動植物の生活の営みを護り、それを犯すものを遠ざけることよ。基本的には結界を張つて森の奥には入らせないようにしているわ。この結界は外からの侵入者を方向感覚を狂わせて森の外に追い出すという性質があつて奥には入つてこられないはずなんだけど……」

そう言葉を区切つた彼女はこちらに視線を訝しげな向けてくる。そんな目で見られても俺にもさっぱりわからないので説明のしようがない。なので肩をすくめてわからないという趣旨をセイリアに伝える。

セイリアはため息をついて話を続ける。

深刻な話はこの後です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1649z/>

---

白黒逃避行

2011年12月19日08時58分発行